

<報 告>

## 中央大学保健体育研究所公開講演会(1)

日 時：2016年6月27日(月) 17:00~19:00

場 所：多摩キャンパス文学部棟 3552教室

講 師：久保田 淳氏  
河 原 工氏

テーマ：スポーツで挑む社会貢献

○司会(小林) それでは、2016年度中央大学保健体育研究所公開講演会「スポーツで挑む社会貢献」を開始させていただきます。

私は、本日の司会を務めます総合政策学部の小林勉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは講演会に先立ちまして、当研究所所長、文学部教授の布目より、一言ご挨拶をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

○布目 所長を務めております布目でございます。

開会に当たりまして、簡単にご挨拶をさせていただきたいと思えます。

本日は梅雨にもかかわらず(といいましても幸いにして雨はありませんでしたが)、暑い中、お集まりいただきましてありがとうございます。

当研究所では、こういった公開講演会を年に1, 2回の頻度で実施しております。研究所が設立されて30年を経過しておりますので、こういった講演会もそれ相応に回を重ねてきているところであります。最近では学生、それから研究員に限らず、地域の方々にもご参加いただいております。本年度第1回ということで、本日、開催に至りました。

毎回毎回、公開講演会は、研究分野においては最先端を走っている研究者の先生方、それから実践分野におきましては、もう本当に先進的な活動を推し進められている先生方をお呼びして実施することができました。そういった流れの中で、本日はFC東京から久保田先生、日本スポーツ振興センターから河原先生のお二人をお招きしまして、このような会が開催できるこ

とを、本当に我々も心待ちといいますか、楽しみにしておりました。とても良い話が聞けるのではないかなとワクワクしているところでもあります。

また今回、このようなすばらしい講演会を企画し、運営してくださっている、研究所の企画委員というのがあるのですが、その中で特に小林先生に大変お骨折りをいただきまして、本日開催できる運びとなりました。

各位に感謝いたしまして、簡単ではありますが、冒頭の挨拶にかえさせていただきます。

ありがとうございました。

○司会 所長、どうもありがとうございました。

それでは、ただいまより「スポーツに挑む社会貢献」というタイトルで公開講演会を始めたと思います。

本日は、大きく分けて三部仕立てを想定しております。

まず第一部は、皆さんからご覧になって右側でございます。FC東京の久保田先生によりまして、Jリーグが今、社会貢献としてどんな取り組みを始めてきているのか、また今後、どういうふうなベクトルを持って活動されていくのかというようなことを、国内外の事例を交えながら30分程度、ご紹介・ご説明をいただきます。

第二部は、日本スポーツ振興センター、Sport for Tomorrow コンソーシアム事務局ディレクターの河原先生より——東京オリンピック2020に絡めまして、2014年に安倍総理が国際公約をしました。日本政府は東京オリンピックの誘致に成功したら、世界中100カ国、1,000万人に日本からスポーツを届ける、そんな壮大なプロジェクトに取り組みますと。そういった安倍総理の国際公約に端を発して、1,000万人、100カ国に向けて、どのようなプロジェクトでその公約を達成するかというお話を伺います。まさにその最前線に日夜ご尽力されているのが河原先生になります。

最後に第三部では、時間はかなり限られてしまうのですが、およそ20分ぐらいを想定して、ご参集いただきました皆さまからの質疑応答、最終的には本日のテーマである「スポーツで挑む社会貢献」にはどんな活用、可能性があるのかということをご一緒にご共有させていただきながら、今後のスポーツのあり方などを検討していければと考えております。

全体といたしましては90分前後を想定しております。長丁場になりますけれども、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、第一部の講師であります久保田先生の簡単なプロフィールを私のほうからご紹介いたします。

久保田先生は、大学をご卒業後、大手金融機関、銀行にご就職されまして、その後、大学院のほうにお戻りになり、スポーツ経営学、今でいうスポーツマネジメントについて専門的なご研究をされた後、現在FC東京でご活躍されています。詳細につきましてはご自身のプレゼンテーションの中で触れられるかと思いますが、そういったご経歴の先生でございます。久保田先生、どうぞよろしく申し上げます。

それからもうお一人、第二部の、JSC、日本スポーツ振興センターの河原先生ですが、実は奇遇ながら、河原先生も大学をご卒業後、大手銀行、金融機関にお勤めになりました。その後、青年海外協力隊への参加をきっかけに国際協力の分野にキャリアを転身されまして、長らく国際協力の分野の開発コンサルタント、詳しいお話は多分、河原先生のプレゼンテーションの中で触れられるかと思いますが、そういった中からSport for Tomorrowのプロジェクトが始まると同時にJSCの現在の職でご活躍されています。こういった、非常にキャリア豊富な先生方から本日はご講演をいただくことになります。

皆さん、盛大な拍手でお迎えください。

まず第一部の久保田先生でございます。よろしくお願いいたします。(拍手)

皆さん、こんにちは。今、紹介していただきましたFC東京の久保田と申します。

30分ぐらい、皆さんにとって良い時間になるように僕のほうも頑張りたいと思います。

では、早速なんですが、一応どんな人が話しているかを知っていただいたほうがいいと思うのでスライドをつくってきました。さっきのお話のとおり、こんな形でFC東京には2001年から勤めています。コーチとか指導現場のほうではなくて、僕はどちらかというと、地域とクラブをつなぐ役割のところを主にやっておりました。業務としては、銀行のときも外回りの仕事をやっていたので、何となくその取り扱いがサッカーとかスポーツに替わったという感じで、結構汗をかきながら、いろいろなところを回りながら、そして今は幾つかの部署を取りまとめるようなことをしております。下に書いてあるのは、日本サッカー協会でも少しマネジメントの講座をやっているのです、そういうお手伝いともしています。

最近少し僕が考えていることを、きょうはお話ししようと思っています。正直に申し上げると、研究とかをしているわけではないので、ただ逆に言うと、普段現場でいろいろな取り組みをしている立場なので、であればそれを少し紹介させてもらいながら、これはこういうことかなとか、皆さんのほうで何か学術的に解釈してもらえたらありがたいなど。僕のほうは活動し

ている様子とかをどんどんお話しできたらなと思っています。

地域の人に応援してもらうために、喜んでもらうために、地域が元気になるようにということで、いままでやってきたことと、これからやらなくてはいけないと思うことを、大体きょうお話しできればと思っています。

その中でも、じゃあスポーツとかサッカーってどういう力があるのか、特徴的なものがあるのかなということを、きょうは事例を話しながら、逆に聞いていただいた皆さんのほうから、「それはこういうことじゃないですか」とか「いや、もっとこんなこともできるんじゃないですか」とか、後でそういうことを聞かせてもらえたらすごくうれしいです。

では、味の素スタジアムでFC東京の試合を観たことがあるという人、手を挙げてもらっていいですか。(挙手)

はい、わかりました。ありがとうございます。

ちょっと映像があるので見ていただきたいと思います。

〔映像上映〕

クラブの様子だとか、あと少し地域の活動の様子も映し出されるので。

もう、この武藤選手は移籍してしまって今はいませんが、Jリーグのクラブとして、トップチームはこんな試合をやっています。

一応、今年で17年目ですね——去年ですか。

トップチームは、こういうふうプロのチームとして活動しています。

ユニフォームを送ったりとかそんなこともしていますし、サッカーってとにかく楽しいものだということで、時々、この映像は地域を回るときに使っている同じものです。

いろいろなところでサッカー教室とかの活動もしています。

白い文字を入れていますけれども、こういう中で、ここに継続することの大切さだとか、もちろんうまくってほしいというところもありますけど、それだけじゃないということは伝えていこうというふうにやっています。

こういう仲間だとかそういうのは、やっぱりこういうスポーツのチームとしてありますよね。

これは小学校を巡回指導しています。年間に220~230回。240回ぐらい回る年もありますね。

この日は生徒も多かったので、コーチも少し多い人数で行きました。普段は2人ぐらいのコーチで行っています。

この活動も、もう10年以上ずっとやっていますね。だから、昔10年以上前に小学生だった子たちが、もう今は大学生だったり大人になっているので、スタジアムでも時々、「僕は小学校のときにFC東京のコーチに学校に来てもらって教えてもらいました」という大人の人が、今、始めていますね。

スタジアムはこういう雰囲気です。これがもっと盛り上がるように、僕らもいろいろな活動を積み重ねているところですね。

コーチは、大体50人ぐらいいます。小学生を教えるコーチから高校生のユースを教えるコーチまで、大体50人ぐらいいますね。

〔映像終了〕

まあ、こういう感じでやっています。

少し活動の様子を紹介します。「社会貢献とは」と考える中で、いろいろな取り組み、まず、サッカースクール、サッカー教室をやっています。ここに書いているとおりです。

これは調布市の「社会を明るくする運動」で、社会福祉の協議会の方たちとかいろいろな方たちと一緒にこのような取り組みもしていますし、子供だけでなく大人もやります。

これは女性を対象にやりました。それからおじいちゃんたちとかも相手にやります。

それから、サッカースクール生は、今都内で20の会場で大体4,300人ぐらいいます。この日は1日みんなが集まって、選手たちと一緒にイベントをやりました。元選手も来てくれたりとかしながら、また試合の前座で、プロ選手と同じピッチで、せっかくなのでこういう機会も設けて、夢というか、そういうチャレンジをする目標を持ってもらうようにしています。こんな感じですね。

あと、例えば大会とかも企画して運営しています。右上は、「ミセスサッカーフェスティバル」というのを母の日にやっています。それから右下のほうは、長野県でキャンプも兼ねた活動ですね。これはJリーグのほかのクラブの子供たちも集めてやっています。左上は小学生が40チームぐらい、夏休みに集まって、御殿場でこういうこともやったり、中学生の大会もやったりとかしていますし、あと東京は、小笠原も東京都なので小笠原にも行きます。それから、八丈島にほかの島々が集まってリーグ戦みたいなものをやったりするときも、僕らが行ってサ

サッカー教室をやったりしています。

これは見ていただくとわかるとおり、左側に立っている男の子、あんまりスポーツが得意そうじゃないと思うのですが、鳥の子たちみんな、じゃあこの日はみんなで野球をやるのか、この日はみんなでサッカーをやるのかして、僕らコーチのほうも楽しくやっています。本当に仲がよくてすごく純粋な子たちが多かったです。

あと、さっき映像の中で見ていただいた、こんな取り組みもしています。ただ、教えている中身は、見ていただいたとおり、サッカーを上手になってもらうためではなく、ここに星印で書いているようなこと（自立・仲間づくり・先生との共有、連携）をメッセージとして伝えてやっています。なので、実は各学校に1回行って終わりではなくて、必ず3回は回るようにしていますし、逆に3回行くのを受け入れてくれる学校に回るようにしています。今は学校も結構カリキュラムがぎゅうぎゅうなので、なかなかこういう機会をつくるのは難しいんですが、それでもこの中身を理解してもらってやっています。

だから生徒たちの授業だけじゃなくて、3回行く中で1回は、実は先生たちも対象に、先生たちうちのコーチで子供たちにやったのと同じ中身のことをやって共有し合ったりとか、そんなこともやっています。それで東京都の教育委員会から表彰を受けました。感謝状という形で、こういう取り組みを評価してもらいました。また部活動にも行ったりしています。

それから、ほかにも講習会のようなことにも取り組んでいます。それはクラブのいろいろなノウハウというものを活用してもらっているところです。これは指導者講習会の様子ですね。当然、座学でコーチングについても勉強したりします。

あとはそのほかに中学生年齢を対象にキャリアデザインですね。サッカーを通じて、サッカーを取り巻く仕事を題材にしながらいろいろな仕事を考えましよう。そのときには保護者の方だったり地域の指導者の方もその場に来ていただいて、みんなで大人も混じり合って、ワイワイガヤガヤしながら、自分の意見も言う、大人とかいろいろな人の意見も聞く、そういうコミュニケーション能力を養う意味も含めて、このような機会も持っています。

トレーナーも当然おりますのでこのような取り組みをしたり、あとは学校だと芝生開き。なぜかという、FC東京も芝生を管理している業者さんとのつき合いがあるので、そういう方にも活躍してもらいながら取り組んでいます。

あともう一つ、FC東京には市民スポーツボランティアという、主にホームゲームの運営をサポートしていただいている方々がいます。書いてあるとおり、皆さん大体1回、FC東京のボランティア団体にまず登録してもらって、あとは毎試合、毎試合、来られるときにきょう行きますという感じでやっています。大体500~600人ぐらいの方が登録してくださっていて、毎

試合100人ぐらいの人に来ていただいています。

それを見ていると、また日常とは違ういろいろな新しいコミュニティができてきているのかなと、ここにスタジアムがあるからとかFC東京があるということで、この10年以上の月日の中で、何か普段とは違う垣根のない、また一つの良いおつき合いを皆さんの中でつくられているようです。

FC東京の理念は、実はこういうものがあります。やっぱり地域の人たちに強く愛されるチームを目指すというのが、要約すると理念であり、もっと短くすると、私が考えているのは地域貢献ということかなと。当然、プロチームとして都民の人に感動を与えるというところもありますが、もう一つは地域との信頼関係を築くということです。

FC東京の事業は、当然プロのチーム、株式会社なんですけど、いろいろな取り組みをしています。そこでお金も稼ぎます。僕は今、青い部分のところ（社会貢献）に取り組んでいます。

そういう中で、さっきの言葉をもう少し変えると、今僕が意識して取り組んでいるのは、突き詰めれば社会貢献ということになり、もっと言うと、結局、最後は笑顔を増やすという活動が、まちを元気にするし、大人も元気にするし、行き着くところはやっぱり笑顔なのかなというのをすごく感じています。なので、さっき「地域貢献」という言葉でこの青い字は書いていたのですが、置き換えればやっぱり「笑顔を増やす」ということなのかなと思ってやっています。

ただ、この社会貢献をずっと意識してやってきたのですが、一番下に書いたようなこと（プロクラブの保有する人材、ノウハウの提供）を少し意識するようになった出来事がありました。それは何かというと、ここに書いているような、伊豆大島で土石流の災害があったことを皆さんも多分まだ覚えていらっしゃると思うんですが、そのときに取り組んだことです。伊豆大島も当然、東京ですから、東日本の大震災とかもありましたが、さらに東京でもこういうことがあり、トップチームはすぐに試合の会場とかで募金活動をしました。一方、講師たち、自分たちは、何をしようか、何ができるんだと。自分たちも同じように募金活動をやる意見もあったんですけど、そうじゃなくて、やっぱり僕たちにしかできないことを何かやりたいよねという中で、もう行きたいよね、行って、さっき言ったとおり、笑顔を増やしたいねと。

ただ、青い字で書いたとおり（社会貢献）、こちらの押しつけだけにはしたくなかったので、先ほど見てもらったように、島々でやるリーグ戦とかで僕らもいろいろな島と交流しているので、すぐに伊豆大島のほうではなく、その周辺の島の知り合いのほうに間接的に、「こういうと違ってどうなんでしょうね」みたいな話をしたら、「ぜひ進めたらいいんじゃないですか」というアドバイスをいただいて、連絡して行きました。

結果としては、すごく喜んでもらえました。とにかく実際にふたを開けてみると、土曜日と日曜日を使って行ったんですけど、もう本当に小さい子から大人の人も、もっと言うと普段あんまりスポーツとかしないんだらうなという人たちもこの日は来て、大人も子供も一緒になって、2日間、土日だったので、中学生とか高校生とも同じようにみんなでやりました。

ただ、何かやっぱり子供たちのストレスがたまっている感じで、すごく喜んでもらったのと同時にそのときいろいろ思ったのが、ここに書いているとおり、多分その当時、こういう同じ思いを持って、伊豆大島のほうに行って、ボールを蹴って子供たちを元気にしたいなという大人の人が、もっとほかにも東京にいたんじゃないかなと。実は東京には800チームぐらい少年チームがあるので、普段、そういう子供たちを教えている大人の中にもいらっしゃるのかなと。ただ、きっとその人たちが申し出ても、伊豆大島側では、今はいいですか、ひょっとしたらそうなっちゃったのかなと。じゃあその違いはというと、きっとFC東京というブランドなのか、そういうもので期待されていたり、それが一つの何か保証されるようなものがあったのかなと思ったのです。であるならば、そのときにもっとこういうことをやらなくちゃいけないのかなと思いました。

実はこのときも、僕らは「行きます」ということを言うだけで、実際に島でグラウンドを確保したり、島の中でいろいろな子供たちとか大人の人たちにPRというか、この日にFC東京のコーチが来てサッカー教室をやりますよみたいなことを呼びかけたのも、それはみんな、結局は伊豆大島の人たちがやってくれているんですよね。僕らはただ「行きます」と言って、行って教えてただけなんですけど、そういうことを全部やらせてもらえてこういうことができたのであれば、何かそういうところももっとやったほうがいいんじゃないかなと思うようになりました。

と同時に、ただ伊豆大島に行って、そこの子供たちの笑顔、地域の人たちの笑顔を増やすだけじゃなくて、やっぱり1年たっても、実は翌年も行ったんですけど、まだまだ復興は終わっていないというか、風化というか、何となく世の中に少し自然と消えてきちゃっている部分もあって、でも決してそんなことはないということを伝えていくとか、そういうことも同時にしないといけないのかなと思いました。決してFC東京の売名行為をするつもりではなく、僕らがこういう取り組みをした際には、もっとこういうことをしましたということを発信したり、こういうメッセージを出していくこともできるのかなと思いました。

ここの図に書いているとおり、サッカーの可能性とかスポーツの可能性ってこういうことなのかとも思うようになりました。

そんなときに——この本って、見たことがある人はいますか。僕は偶然、本屋さんで見つけ



たんです。ちょっと家でも置きづらくて会社でも置きづらくて、パパパッと本を読んだのですが、AKBもこういう取り組みをすごくやっているらしいんです。中には震災の被害を受けて、AKBのステージを地元で見ていた女の子の中には、それに感動して、今は逆にこのメンバーになって、書いているとおり、今度は訪問して逆の立場で、なんていう、そうやってずっとつながり続けているような取り組みをされているようで、すごいなと素直に思っていました。

また、まちづくりとか地域ということに関して言うと、新潟県でこんな取り組みもされています。このディレクターの人は北川フラムさんといって、瀬戸内海のほうでも、多分、島々でいろいろなこういう芸術祭というのが行われているんですけども、要はそういう過疎と言われりような地域でも、今すごくまちづくり、地域の活性化としていろいろな取り組みがされているという事例なんです。僕も行ってみました。

そのときに改めて、じゃあスポーツだからとかスポーツにしかというものが何かなというのを自分なりに極めたかたんですが、今、僕自身はそこが明確に語れるような理解にはまだ落とし込めていません。ただ、これが何かなというのを考えながら、今は現場の活動を一生懸命やっている状況です。

少し話を替えますけれども、防災プログラムなんかも、ただ単に机の上で学ぶ、話を聞くじゃなく、この写真の感じで楽しみながらいろいろなことをやっていたりしているものがあります。

このように左の写真は、みんなで毛布でね、実際の震災とかの場面ではこういう場も出てくると思います。それをこういうリレー形式で、一つの運動会じゃないですけど、こんな活動をやっているNPOの団体もあったり、事例として行われたりしています。

このスライドなんかは、まあ、赤い文字（人や物を運ぶチカラ・四つん這いで逃げるチカラ・消火器で狙うチカラ）の力が求められている。そういうのをこういうゲーム形式で、でもちょっとスポーツの色を出してやれているものなのかなと思っています。

あと鬼ごっことかも、昔はきっと（昔、昔って言うのもあれなんですけど）、ただ単に楽しくてワーツと遊んでいたら、結果としてきっと知らず知らずのうちにこういう能力が培われていたんだろうなと、今にして思うとありますが、逆に今は割と公園もなくなって、なかなか鬼ごっこを日常のようにやる機会も随分減っちゃっているのかなと。逆に言えば、こういう力を養うために、鬼ごっこを使ってとか——実は鬼ごっこをスポーツのようなルールをつくって、スポーツ鬼ごっこという競技がもう今できていて、今度の茨城の国体とかでも種目選ばれたというのを、スポーツ鬼ごっこ協会（というのがあるんですね）の人から聞きました。

あとはサッカーというか、スポーツだとこういう事例もあると思います。いろいろと僕も話

はさせていただきますが、まさにこれも、この赤字（民族間の交流を促し、信頼関係を構築する！）で書いたような、政治だけではなかなかできないようなこともスポーツでできてしまうことというのはあるのかなと思います。

あと今シーズンから大阪に、ガンバ大阪がホームスタジアムとしている吹田のスタジアムができました。これを計画された、当時、今のガンバの社長の前の方なんですけれども、その金森さんという方といろいろ話をしたときに、これはガンバのスタジアムじゃないということをごく盛んにおっしゃっていました。これはガンバのスタジアムじゃなくて関西の地域のスタジアムなんだと。だから、ガンバの職員が「ガンバのスタジアムが」とか「うちのスタジアムが」という言い方をしたら、それを正すというか、訂正させると、それはすごくおっしゃっていました。まさに、この赤い文字（地域の笑顔をつくる、関西の活力をつくる、次代の文化をつくる）の、これを生み出すのに、そのためにこういうスタジアムをつくってやっているんだという話を聞かせてもらって、僕はすごいなと素直に思っていました。

そうした中で、少し紹介したいのがこちらです。これは、実は今年の4月に府中市の中学生たちを試合に招待しました。どういふ子供たちかという、家庭としては少し貧しい家庭で、今、世の中でも少し子供の貧困というのがニュースになったりしていると思うのですが、そういう塾とかになかなか行けないような子供たちのために府中市が学習支援をしています。公民館の部屋とかを開放して、そこに大学生かな、アルバイトがサポートに来て勉強を無料で教えてあげてという。そういう中学生たちをもう少し屋外というか、違う体験をする機会がなかなかつづけていないということで、せっかくなので近いし、FC東京の試合を観に来てもらうということでやりました。

そのときに、ただ試合を観てもらって終わらせちゃうのももったいないというか、つまらない話だし、そうやって学習支援の機会をわざわざちゃんと利用している中学生たちだったので、もう一つ、試合観戦のほかに、じゃあ試合を観に来る前に、途中で出したようなキャリアデザインの話を少しさせてもらって、この先も勉強するとか学習することに意欲的に取り組んでもらえるような場をつくらうと。試合当日は早めに来てもらって、スタッフと一緒に職場体験もやったり、あとはスタジアムにいるプロフェッショナルな仕事の人の話を聞いてもらったり、そんな活動をやりました。

実は、子供たちの中には、この企画を立てたときになかなか試合会場に行くことができないという子供たちもいて、それは僕もそこまで配慮ができていなかったんです。このような応援してくれる人たちの力でできたと同時に、今まで自分もこれをやる前は全然知らなかったんですが、やっぱりこういうことが世の中の問題として、課題としてあるんだなということを知り

ました。参加した中学生たちにはそれなりの、まあ、評価というか、喜んでもらえたようだったので、またこういう活動は続けていきたいなと思っています。

課題としては、僕らはこれを取り組んでみて確かにいい活動だという手応えはあるんですが、これをどうやって継続的にやるのかというのが次の我々の課題です。実はこの問題は、Jリーグ全体というか日本全国に、多分、各地各地にある課題だと思っているので、本当はFC東京が取り組んだこういうことをほかのクラブにもうまく伝えたり、ほかのクラブでも共有してもらって、全国各地で同じような課題を抱えている子供たちを何か支える機会ができればいいなと思っています。

もちろん事業の採算性を含め、いろいろなそういう部分は大事です。事業を継続していくにはお金の部分も大事なんですけど、同時にここに書いてあるようなこと（多様な個人・組織・コミュニティをつなげる）もしっかり意識しないとだめなんじゃないかなというのはすごく考えています。やっぱりスポーツをしたいという人たちは、乱暴な言い方ですけど、場を用意してあげれば、多分いろいろと進むものも進むでしょう。ただ、やはりなかなかそこに向かわない、きっかけがない人たちをどう振り向かせるかということも同時にやっていかなければいけないのかなと思っています。やっぱりそれにはそういう接点をつくっていくしかない。もう一つは、これまで話したような、今度は逆に自分たちのほうから、僕らのほうから社会の課題を見つけに行き、そこに僕らが何かかかわっていくしかないのかなと思っています。

接点を増やすという意味では、様々な方面においてどんどんやっていくようにしています。何もグラウンドの上だけの話じゃなくて、サッカー教室とかに来てもらうだけではなくて、もっと多分できることもあるんだろうなということです。

武蔵小杉にある商業施設の屋上に、こんなものがあります。すごくきれいな、もう公園です。すごく人気もあるようで、なぜこんなものが屋上にできたのかな、人気があるのかなと思うと、逆を言えば、多分ここに書いたようにそういうニーズがあるわけで、解決する空間として考える人がいて、ヒットしているんだろうなと思いました。

それで、同じようなことを僕もこれを見て考えました。だったら何かそういうことを同じようにできないかなということで、府中の駅前に伊勢丹があるんですが、ちょうどタイミングよくあちらからも、屋上の活用で、最初はフットサルコートをつくって活用しませんかと言われたのです。それはもちろん喜んだのですが、なるべく、ただフットサルをやるだけじゃない形にしたいなと思ったのです。

こういう雰囲気です。もともと屋上でデッキのある施設だったんですが、コートもつくり、今は、実は屋上で流れ星の観測をやったりとか、この時期、去年もそうだったんですけど、ピニ

ールプールを置いて小さい子たちの水遊び場にしたりとか。要は、サッカーコートじゃなくてみんなが交わる空間にして、でももちろん、できることとしてはいろいろな活用をしています。なるべく意識したのは、やっぱり偶然性だとか、あまり意識しない中にも何か感じられるようなことを仕掛けていかないといけないのかなというのが、今思っているところです。

それで社会貢献に挑むというときに、途中で触れたように、やっぱり課題を自分のほうから探りに行かないとダメなのかなど。依頼を受けて、「サッカー教室をやってください」と言われて、「わかりました」と言って、やる。そうすると、子供たちも笑顔になるし喜んでもらえるんですが、それだけじゃなくて、この地域にある課題って何だろうな、だったらそれを何か自分たちでというアクションは必要なのかなど、最近思うようになってきました。

と同時に、じゃあそういう取り組みを自己満足で終わらせないためには、何かそれがちゃんと評価されるものにしないといけないので、評価をされるとか、そのよさをみんなで共有してもらうために、さらに下に書いたような、こういうこと（多様な個人・組織・コミュニティをつなげる）をもっともっとしないといけないのかなと。今度は逆にこういうことができれば、多分お金が生まれると思っています。そうすると、こういう活動にしっかりと成果が生まれるものとして、また応援してくれる（それが行政なのか、民間の会社なのか）というふうに思っています。

少し駆け足で話しましたが、最後に笑顔の話で終わりたいと思います。実は昨年、FC東京のコーチたちがネパールに行きました。この後、お話しされる Sport for Tomorrow の活動の一環で、今回はFC東京がバレーボールチームと一緒に行ったときの映像があるので、すごく子供たちの笑顔が素晴らしいので、見ていただけたらと思います。

#### 〔映像上映〕

ちょっと日本人にはないぐらい、うまくバーツとはじけている雰囲気があります。

こういうところにも行ったみたいです。僕は行ってないんですけどね。

なんか、上の学年の子たちが小さい子の面倒をよく見るって言っていました。行ったコーチたちに聞くと、みんなすごく仲がいいというか。とにかく年上の子が年下の子の面倒をよく見ると言っていましたね。

多分、言葉は全然通じていないはずなんです、本当に。

もう見てのとおり、本当にサッカーボール1個だけでいろいろな活動をやってきたみたいで

す。

補足をすると、ネパールも大震災があってすごく大変な時期があり、それでさっきのスポーツのようなも含めて、防災教育とともに子供たちを元気にしましょうという、そういう大もとのプログラムで行ってきたものです。

これはカメラマンやうちの行ったスタッフが、とにかく子供たちの様子が印象的だったようで、こういう写真が結果としてすごくたくさん撮れたみたいで、こういうものにまとめたというものです。

〔映像終了〕

以上です。ありがとうございました。(拍手)

○司会 久保田先生、ありがとうございました。

質問等につきましては、この後、第二部の河原先生のご講演をいただいた後にまとめてフロアからの質疑応答をさせていただきますので、このまま続けさせていただきます。

それでは、久保田先生、どうもありがとうございました。(拍手)

続きまして、日本スポーツ振興センター Sport for Tomorrow コンシーシアム事務局のディレクターであります河原工氏による「スポーツの持つ可能性と国際貢献」ということでご講演をいただきます。

皆さん、盛大な拍手をお願いします。(拍手)

河原です。久保田さんから素晴らしいプレゼンがあって、さすがだなと思って見ていました。

まず自己紹介をします。話にありましたように、今ちょうど50歳で、私の息子が農学部に行っていますけれども大学3年生なので、多分、皆さんの親と同じような年代です。

銀行から青年海外協力隊に行って、まあ、もう一回勉強し直そうと思っていろいろやっておりました。むしろ大学まではサッカー、スポーツのほうに思いきりかかわっていたんですが、ちょっとそこからずっと離れてほかのことをやっていて、一昨年、また縁があってスポーツのほうに戻りました。むしろその前の20年ぐらいは国際貢献とか、いわゆる途上国開発の仕事とかいうことをしていました。ですので、何が言いたいかという、あやしい者ではないということだけです。

きょうは私も実務者のほうなので、皆さんにどうこうと、ああだこうだと言うつもりはあまりありません。少しお話しして、それから私もムービーを2つほど用意していますので、むしろ皆さんに考えていただきたいということです。ただ、考えていただく際にも、何かよりどころになることとか、考え方をどう整理したらいいのかということになると思います。

またちょっと話が飛躍しますけれども、皆さん今は大学生ですが、今後、社会に出て行く中で、物事というのはなかなかうまくいかないことが多いです。なぜこれはうまくいかないのかなとか、どうしたら自分のやりたいことがうまくできるようになるのかなというときに、じゃあ物事ってどう考えていったらいいだろうというよりどころになるようなものが、スポーツを考えると幾つかあるので、そういったものを整理するきっかけにもなるかなと思っております。

それで以下の点です。まずスポーツの可能性や力、そしてスポーツを通じた国際貢献、それから Sport for Tomorrow は私が今かかっている仕事ですけれども、これは紹介なので、最後に少し時間があればという程度の話です。

では始めます。実はもう、「スポーツは世界を、未来を良くすることができるのか」ということが私の皆さんに考えていただきたい全てです。これをご自分たちで考えていただければ、そして、あとは映像を見てくださればいかなと思います。

さっきの映像もありましたし、何となく皆さんスポーツっていいんじゃないかなと思っているんですが、じゃあ本当に、結局それで世界とか未来とかってよくなっていくのかなと考える。そこで自分はどうしたらいいんだろうとか、周りはどうなるんだろうとか、そもそも何か大方針とか政府はとか、政府のことばかりああだこうだと言っているけど仕方がないので、じゃあどうなんだろう、どういう人がかかっているんだろうとか、いろいろなことがある——ということを考えていただければよいかと思います。

はい、これ、スポーツ基本法です。結局、「スポーツの可能性や力とは」って、スポーツとは何ぞやといったときに、実は結構、ここに書いてあるんですね。これ、1回読んでみるといいですよ。ちゃんと Google で検索すれば出てきますから、一番上のほうにありますけれども、「スポーツは、心身の健全な発達、健康及び……」とか、下線が引いてあるあたりが定義で、やっぱり「身体活動」ですね。それで「生涯にわたり」ということは、スポーツは若者だけのものかという点が、また次に出てきます。「健康で文化的な生活を営む上で不可欠なもの」と。「自発性のもとに」とか「スポーツに親しみ、スポーツを楽しむ」、そしてスポーツに「参画する」。だから、支える人とかいろんな人がいる。だんだんと何か目指すべきところというふうになっていきますが、そのあたりがいろいろ書いてあります。

次は、オリンピック憲章です。これも1回時間があつたら読んでおくとよいです。結構、分厚いので、まあ、余裕があればいいですけども。

オリンピック・パラリンピックが今度リオでありますけれども、あれは本当にスポーツのアスリートたちだけのものかという、大もとは実は違います。オリンピズムとは何ぞやというと、ここに書いてあるとおり、一言で言うと「オリンピズムは人生哲学」だと。だからもとの趣旨は、そういう哲学を広めるためにオリンピックという競技大会を開こうということです。ここにもいろいろ、目指すところ、世の中はどうあるべきかということが書いてあります。

3行目に、「手本となる教育的価値」とか「社会的責任」とかいろいろありますよね。下に行くと、「人類の調和のとれた発達に役立てる」とか「人間の尊厳保持に重きを置く」とか「平和な社会を推進すること」と。そして「種類の差別もなく」ということがあれば、人種とかそういうことも考えなくなりますし、当然ながら障害のある人たちにもスポーツというものはあります。

そして最後に、あなるほどなと私も思ったんですが、「オリンピック・ムーブメントのスポーツ組織は、自立の権利と義務を有する」というものです。

ちょっとほかにも紹介していくと、ネルソン・マンデラさんという、南アフリカで初の黒人の大統領になった人も、スポーツというのは力がありますよとか世界を変えていくことができますよということを、おっしゃっています。

次は、さきほど一番最初のスライドにスポーツ基本法がありました。あれは法律です。法律に基づいて、基本計画というものを日本政府としてつくっています。実は、そういうのは各県であったり、市町村であったりでもつくっていかなければいけないのです。そしてこれがまとめたものなんですけれども、後で資料として読んでください。

日本スポーツ振興センターでは、後でも一つお見せしますが、いわゆるトップアスリート向けの設備もあるんですが、私が申し上げたいのは、日本政府も、トップアスリートだけではなくて「③住民が主体的に参画する地域のスポーツ」ということで（ここにも書いてありますけれども）コミュニティであったりとか、いろいろなことを考えましょうということを言いたいのです。そういう点がなかなか、実は漏れてしまっていたり、じゃありオのオリパラでメダルとか何とかということでもないんだな、なんていうふうに、これを見て改めて思います。

この左の端に「⑤国際交流・貢献の推進」とありますが、それに基づいて今、私は仕事を行っています。

こういうふうに政府も目指すところがあり、それをこうやってまとめて書いてありますが、

赤字で書いてあるところが一言で、それを分解していくと下にあります。だから、「青少年」もありますし、「地域」の人たちとか、「健康」というキーワードもありますね。ほかの国からも信頼されないといけないでしょうということもあります。あと、少し加えていろいろこういうような、「スポーツの目指すところは」というものがあります。

では、ちょっと視点を変えていきます。結局、スポーツって誰のものでしょうか。よくスポーツにかかわる人という、する人、見る人、支える人というのがあって、ここから実務で携わっていったら、私もつらつらと思うところはあるんですけど、スポーツが得意な人もいれば不得意な人も当然います。好きな人、嫌いな人、関心がある人、関心がない人、不得意だけれども好きな人、得意だけれども嫌いな人とか、ある時期はちょっとそんなことはやってられないよという時期とか、多分いろいろあるかなと思います。

あとは赤ちゃんからお年寄りまで。今、ラジオ体操というのもよくテーマとして扱っていますが、3歳の子がラジオ体操をすると、体操なのかな何だろうというふうになっちゃうんですよ。でも、それでもいいんですよとラジオ体操連盟の方がおっしゃっていました。

障害がある方もそうです。きょう、もう一つ障害をテーマにしたビデオを用意しています。これもご覧になって、皆さんにいろいろ考えていただきたいです。人ばかりじゃなくて組織もいろいろありまして、FC東京さんのように、スポーツをまさにいろいろなことで実施していく、推進していく人もいれば、支える人、メディアとかもありますよね。そもそも、広める人、見せる人、支える側というところがいわゆる裏方。あともう一つ、社会貢献となると、スポーツをどうにか広げていこうということもありますが、スポーツを通じて社会の課題を解決していこうと、スポーツを手段として考えるという視点ですね。

私の今の仕事にもありますけれども、国際協力、貢献のほうの話に移っていきます。実はそれが大もとはどこにひもづいているのかなということ、2015年からは Sustainable Development Agenda です。その前の2000年から2015年までは国連のほうで採択した Millennium Development Goals というので、世界規模で貧困を減らしていこうとか社会開発の課題をとということで目標をつくっていたのですが、それを2015年からさらに2030年に向けてということで、国連でいろいろ議論をしてアジェンダが決まりました。その中に、スポーツというものが国際開発においても有効な手段であるというふうになつていっています。

もっとすごいのは、これは国際開発の協力のほうの世界にいたから言えるんですけど、この一つ目って、30年までに貧困をなくすって言い切っているんですね。なくそうと。前は結果としてそれなりに減ったのですが、今度は2030年までに貧困をなくすんだというふうに言っています。その中でスポーツってどういう役割があるんだらうかと。



国連も、ただお題目、目標を挙げただけじゃなくて、ちゃんと UNOSDP というオフィスを設置して、スポーツを使って国際開発を推進していこうと動いています。

ちなみにリオ大会にも、今、イスラム過激派など大変な状況も日々ありますけれども、難民でも、オリンピック・パラリンピックにも難民の選手という参加で IOC が認めて出られるようになりました。

また、「スポーツと開発の関係性」ということで、よくいろいろな人といろいろな話をするのですが、いつも議論がかみ合っていないなと思います。いろいろな人がいろいろなことを話しているとき、一体何の話をしているんだろうと、いつも空中戦ですれ違ってしまっているのです。そういう意味でこういうものを整理する必要があるなと考えます。

それで「スポーツの開発」ということで、これはいわゆるスポーツ、ドストライクというので、スポーツそれ自体を発展させていこうということです。もう一方が実務で感じていることで、じゃあスポーツを発展させるといっても実はすごくいろいろなことがあって、法整備とか最先端とか、本当に科学とかいろいろなことを考えていかなければいけないですし、栄養とか心理学なども。そもそも普及のために、よい指導者を育てなければいけないでしょう。よい指導者を育てるにはどうすればよいか。また仕組みとか審判だっているでしょう。有名な競技はいいんですが、有名じゃないとかメジャーじゃない競技はどうすればいいんだとか、スポーツそれ自体も、ものすごくいろいろなテーマがあります。

実はこれ、海外の国から、「じゃあ日本ってどうなっているんですか」とよく聞かれるんですね。参考にしたいと。日本ってそこまでうまくできているのかなあなんて思っていますが、まあ、できていることとできていないことがあります。

「スポーツと開発」ということでは、もう少しスポーツが地域社会とかによいインパクトを与えられる影響、実務ほうでいくと、さっきのいろいろな笑顔が出たりするよい大会を運営したり、あとはマーケティングでよりよくスポーツが広がっていくようなことなのです。結果として、日本というのは国民体育大会を各県で持ち回ることによって、やっぱりハード面とかでもよいブランドがいっぱいできています。

それで、健康増進とかスポーツを通じてのコミュニティ、おじいちゃん、おばあちゃんが元気になるとか、もうこれはすばらしいですね。

もう少し考えを進めると「スポーツを通じた開発」ということで、ここの左側に、貧困、紛争、ジェンダーとかありますね。例えばサッカーで集まったときに開発途上国でよくやるんですが、数万人集まると、パブリックビューイングで HIV の啓蒙とか、もっと言うと、手を洗いましょうとか、みんな、ルールって世の中にあるんだぜとかいうことなど、いろいろなこ

とがスポーツを通じて言えます。

あと、私たちのほうで学校体育カリキュラムというのも扱っているんですが、実はこれをあえて挙げたのは、それがスポーツの開発につながるのです。結構、アフリカのケニアとかでも、スラム街でも、スポーツを通じて規範とか、子供たちにいろいろな社会とカルールがあるよと教えていったんですが、その中から代表選手まで育ったりして、いつのまにか一番下を書いてある「スポーツを通じた開発」をやっていることにつながり、実務をやっていると何かいろいろなことが現象として起こってくるんだなというのがあります。

だからそういった面を、都度都度、主体となるこちら側が、提供するときに何を目的としてやるのかというのをすごく整理することが大切なと思っています。その目的がはっきりしないと、結局、これって何のためにやっているのかというのがぶれてしまうので、そうするとあまりよろしくないということです。

次に書いてあるのは、仕事で今悩んでいることとかいうか、いろいろな思うことを挙げています。そう、鬼ごっこが出ていましたけれども、本当に鬼ごっこか祭りって、あれはスポーツと言っていいんでしょうかとか、チェスは？とか、いろいろありますよね。

その次は Sport for Tomorrow の紹介になってしまいますが、国のじゃなくて、国が主導しているプログラムなんですけど、こういうコンソーシアムで（次のスライドにあります）今、200ぐらい団体があって、その事務方ということで、私はあまり現場のほうにも行けずに、明日とかもスポーツ庁と打ち合わせがありますが、そういうミーティングばかりやっています。

あとは写真もありますが、それよりもむしろ映像を二つ見ていただきたいので、そちらに移ります。

今からお見せするのは、いわゆる日本スポーツ振興センターがトップアスリート向けにやっている、むしろスポーツ最先端のほうの紹介です。

#### 〔映像上映〕

ありがとうございます。

今のは実際にあるのですが、東南アジアの国から僕たちの国にもああいうトップアスリート育成システムをどうやってつくればいいんだとか、どういうふうにシステムを学んでいったらいいんだという相談も受けます。

もう一つは、ちょっと、趣を変えます。次は障害者です。視覚障害がある子と健常な目の見える子の、お互いを理解するという目的でイベントを企画しました。

## 〔映像上映〕

(映像終了)

こういうのを向こうの、彼らだけでやってくれることを願って、そういうふうにならないう仕掛けているんですが、実際は全然うまくできていなくて、マニュアルの配布とかも、365校にという多さもあるのですが、どうもまだ配布されていないんですね。やっぱり国際貢献をやる時というのは、そこまでどういうふうになら組み込んでやるかというのが、実は大変だなというのがあります。この活動自体が本当によいというのは多分わかりだと思のですが、ちょっとそういう実務という点で、まだなかなか難しいものもあるということです。

最後になりますが、世界を、未来をよくすることができるかという、結局、その答えは皆さん自身で考えていっていただくしかないのかなということと、この仕事をやっていて若い人たちに一つだけ申し上げていることなんですが、大学生のときから海外に出かけられるのもいいんです、それは全然否定する気はありませんが、本当に役立ちたいと思ったら、日本の中で役立てる人にまずなることが大切じゃないかなと思います。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 お二人の先生、どうもありがとうございました。

今、お二人の先生にご講演をいただきましたが、会場の皆さんから何かご質問・ご意見、何でもよろしいので、自由な形で挙手をいただいてご質問いただければと思います。

どなたかいらっしゃいますか。

シライさん、他大からいらしているので、ぜひ一つご質問をいただければ。

ご質問の際は、ご所属とお名前を簡単をお願いします。

○シライ 学生じゃないんですけど、すみません。月曜日と水曜日に非常勤で来ていますシライと申します。

久保田先生にお伺いしたいんですが、私、サッカーはちょっと種目が違うのであまり実際に見ていないんですが、きょうの映像と説明を聞いて、ちょっとFC東京を好きになりました。ああ、これだったらサポートしたいなと。要するに、フィールド以外のところで何をやっているかというのがわかるので、なんか温かみが伝わると。

そういうことを伺いながら、僕はどういうことを考えたかということ、今までも、どうしたらスポーツに勝つことしか価値を見出していない人に対してそういう世界に引き込めるのかなと

思いました。スポーツ貢献というのは全体的なことが重要なんだよということを伝えたいときに、Jリーグなどは結構そういうところが確立されているけど、例えば久保田さんが講師として行く場合に、どういう言葉かけをしてこちらの世界に引き込もうとしたりしますかね。すごくそこは私自身も悩むところなので。

要するに、例えばその際に言われるのは、予算がないとか人手が足りないということがよくある話なんですけど、やっぱりこういう話を聞くと、非常にスポーツの豊かさというのが見えてきます。この講演をこのまま全部見せてあげたいんだけど、そうもいかないの、そういうところでこれからチャレンジしようとするときに、どんな言葉かけでスポーツの豊かさというものに対して魅力を伝える、もしくは引き込めるかということをごどのようにお考えなのか、お伺いしたいと思います。

○久保田 例えば、勝ち負けだけじゃないところに関して言えば、途中で紹介したような指導者講習会の場面であったり、いろいろな指導者の人たちが集まってもらう中で、僕らからも発信したり、皆さんの現場の声も聞きながら、本当にそういうのを重ねていながらという感じですよ。

サッカーの話で言えば、よくイエローカードとかレッドカードがありますが、実はグリーンカードというものもあって、よく小学校の活動なんかでも、例えばラインインを割ってしまったボールを、相手チームのボールなんだけれども拾ってきてあげて「はい」って渡してあげたりするのも、それはもうフェアプレーとして、そういうときには審判がグリーンカードを出しましょうとかいう仕組みがあったり、いろいろなそういうものができてきたりするので。

あとやっぱり親とかも加熱してきて、結構周りで見てワイワイ言ってしまうような場面がある。そういう時は、みんなでマナーを守って見ましようとか、実はサッカーは割と今、一生懸命にそういう取り組みもしたりしているところなんです。お父さん・お母さんも、サッカースクールなんかでも親子でやると、親御さんなんかは「結構、思ったより難しいですね」とかいうふうになって、そういう親子で一緒にやる機会を通じて、子供の気持ちも一緒に体験してもらったりする。

ただ、そういうスポーツの部分って、やっぱり大人がお手本になっていかないといけないと思っているので、うまく答えになっていないんですが、そういう機会を、話し合っていく場面をいろいろ増やしていくしかないのかなとは思いますがね。

あと、僕らもこういう活動とか今なるべくやっていることとかは自分たちでとどめずに、途中で言ったように、どんどん勇気を持って僕らもやり続けたいです。やっぱりあるんですね、

当然、こういう活動をしているときに、チームが勝っていないと、スタジアムですごい熱く応援してくれる人してみると、そういうパワーとかをもっともっとトップチームの強化のほうに回すべきだみたいな声も聞こえたりしますが、それはもうやり続けていくしかないというか、今はそんな感じです。

逆に当事者として、むしろ何かよいアイデアがあれば教えてほしいなというほうですね。

○シライ 年間220回という、あの継続力はすごいと思います。活動されている選手はどのエリアの選手ですかね。

○久保田 僕の説明が不足していたと思うんですが、お邪魔しているのはコーチたちなんです。FC東京の場合、トップチームのプロ契約をしている選手が大体30人ぐらいいて、あとはコーチ陣ですよ。コーチ陣は、トップチームを教えているコーチから、高校生、中学生のチームを教えているコーチ。あと小学生は、さっき申し上げたように50人ぐらいのスタッフが20の会場で分かれて、メンバーとしては6～7人が午前中、朝から学校へ行ってお昼に帰ってきて、午後からは自分たちのサッカースクールを教えるようなサイクルでやっています。

ただ、年に1～2回は選手たちも時期を見つけて、30人ともがいろいろな学校に分散して、お邪魔して、給食を食べさせてもらったり、あと学校側のリクエストによっては、お話で済ませるところもあるし、実際に子供たちと動いたりとか、そんな形ですね。

でも、学校側によってすごく温度差もあったりして、中には、行くと校長先生があらかじめ保護者の人にもアナウンスをしておいてくださって、保護者の人も一緒になって見てくれるような場を整えてくれる学校もあれば、僕らが行く日は先生のお休みの日みたいな感じで、なんかもう預けて願いますだけになっちゃうような学校もあったりとかします。そういうのは、ちょっと我々としても残念かなと思ったりもします。

ただ、そういう積み重ねの中で、なるべく先生方にも一緒に共有してもらおうという、そんな感じでやってはいるんですけどね。

○シライ ありがとうございます。

○司会 ほかにいかがでしょうか。

○タカミザワ 経済学部2年のタカミザワといます。

久保田さんに質問があります。先ほどの説明で、商業施設の屋上に、そういうサッカーとかいろいろなものを楽しめるスペースをつくるという話があったんですけど、今、小学生とかは学校が終わってサッカーをしたくてもするスペースがすごく減ってきていると思うんです。そういう子供たちが増えて、例えばサッカーも含めて何かスポーツをやりたいなと思ったときにすぐできるような環境づくりを地域に広めていくという点でお考えをお聞きしたいんですけど。

○久保田 一つは、やっぱり学校だと思うんです。学校の曜日によってはそのサッカークラブがやっている学校もあるでしょうし、でも、そこも毎日じゃないと思うので、そうすると、放課後の時間、学童クラブとかが使ったりもするのかな。でも、だれも使っていない曜日とかもあると思うので、一つは何かそういう場所を体育館も含めて——やっぱり日本の場合、学校の施設というのはすごくあると思っているので、実は紹介はできていなかったんですけど、学校の放課後の時間というのは僕らもすごく気になっている時間として、好きな子とかはサッカースクールに来てくれているし、やる子は自分でチームに入っているけれど、ひょっとすると、なかなか外遊びをしないような子たちとかもいるのかな。あと、今のお話じゃないですけど、何かきっかけがというのであれば、一つは僕らがお邪魔することで、何かそれがきっかけになるようなことは意識的にやったり、ということですね。

ご質問の場所の部分について、今すぐに僕がパッと言えるのは、やっぱり学校のところを、まあ、先生とかの力をかりるか、あとは今であれば地域の一つのスポーツクラブづくりの拠点にもなるかもしれないので、そういうところになるのかなと思います。

あとは新しくつくり出すという意味で、限られた空間という意味でいけば、僕らがやっているサッカースクールの中にテニスコートを持っている方が、7、8面持っていたうちの一つか二つを、フットサル、ボールも蹴られるような形に変えた方もいます。その方は、地域で何となく少しそういうことをやっている子供が多いなと思われたらしいです。

ちょっと今、パッと思い浮かぶところはそんなところですよ。

○タカミザワ 自分も学校というのは一番有効的だと思うんですけど、全部が全部じゃないですが、学校が終わって放課後にそうやって自由に遊べるような学校もあればそうじゃない学校もあったりして、子供たちにとって気軽に遊べるようなスペースというのは、FC東京にとって、ホームが日本一の都市・東京であることを考えると、チームとしてその役割を担う部分は少しあるのかなと。

○久保田 そうですね。日常の場面からではないんですけど、結構広いアスファルトの駐車場とかだと、時々、人工芝を敷いてそういう空間をつくっちゃったりして、フットサルのイベントをやったりする団体とかもあります。商業施設でも何か協力して、ひょっとするとそういう人工芝とかをうまく敷いてもらうことで、小さい子たちであればそんなにボールも飛び出さないだろうし。あとはそういうことをちょっと繰り返しやっていったりするのがよいかも说不定ですね。

○タカミザワ ありがとうございます。

○司会 ほかにいかがですか。

○アオノ 貴重なお話をありがとうございました。総政のアオノです。

僕も久保田さんに質問があるんですけども、地域貢献ということで地域に入ってサッカーを教えるということだったんですが、その地域に入るときに、市だったり、区だったり、また東京都だったりというところと、意見とか考え方の食い違いに至ってうまく進まないことがあると思うんですけど、そういうことに関して具体的にどのように解決したのかをお聞きしたいです。

○久保田 今の部分、一つは小学生の話でいいですかね。

さっき話したように、実は少年サッカーは大体700チームぐらい都内にあって、じゃあ、きょうは調布市の教育委員会の人と一緒に一日サッカー教室をやります、来週は今度、豊島区のほうでとかそんな感じでやっていて、FC東京として小学生の年代のチームは保有していないんですね。僕らは直接セレクションとかして、小学生のところではチームは持っていないので、その700のチームと、何かこう、優勝を目指す中で競い合うとか、そういう場面が基本的にはないんです。

何が言いたいかというと、実は普段、サッカースクールに来ている子たちも、週末は自分のそういう学校とかクラブのチームで活動していて、そのうちの週1日とか2日、もうちょっと上手になりたいな、もう少しボールを蹴りたいなという中で、FC東京のサッカースクールに来てもらったりしています。

あと土曜日とか日曜日の活動もそういう中でのものなので、割と自分のチームの活動と重なっちゃうと、それはこっちに来るときもあるかもしれないけど、大体みんな自分のチームでやっていたりとか、そういう形です。ただ、逆に小学生でもチームを持っているJリーグのクラブもあります。そういうところは少し子供の取り合いというか、こっちに来るとか来ないとかあっちにとかいう部分での問題は確かに起きたりはしています。

FC東京は、もともと昔はチームを持っていたんです。東京ガスの会社が母体となってきたクラブチームなので、東京ガスが地域貢献活動の一環でサッカースクールをやったりチームの活動を持っていたものを、FC東京でプロになってこれから地域に応援してもらおうという中で、小学生のチームはなくして中学生からとしています——という部分です。

あとは、逆に地域とのという意味では、指導者の講習会も実は都内で、東京って16の地域に分かれているんですけど、ほとんどの地域の講習会にFC東京のスタッフが行って指導したりとか、いろいろな情報がクラブに集まってくるものは、どんどん積極的に提供していくようなことはしています。

○アオノ ありがとうございます。

○**司会** 第2部の国際貢献のほうに対して、何かご質問等がありますか。

○**アンドウ** 経済学部4年のアンドウと申します。お話をありがとうございます。

すごく私事なんですけれども、僕自身、以前にご縁がありまして、秋田県で高齢者向けにスポーツで出会いの場をつくろうみたいなイベントを開いたんです。実際、高齢者の方たちはスポーツを通じて笑顔になってくれたし、出会いの場もあったなとすごく感じているんですが、そこで同時に感じたのが、そこに参加してくれる人たちって、結局、スポーツとか健康とか体育とか、そういうことに興味がある人たちなんです。

それで河原さんに少しお話をお伺いしたいんですけれども、「キークエスション」のところの「スポーツは、世界を、未来を、良くすることができるのか」ということに対して、僕自身がその経験から感じたこととしまして、結局、変えることができるのって、スポーツに対して何らかのかかわりがある人たちだけなのかなということのを少し考えたんです。じゃあ、違う文脈の人たちにどういったふうに響かせていける可能性があるのか。ほかの全然スポーツと関係ない人たちに対して、スポーツの効果というものを波及させていく可能性があるのかといったことと、あとは、もしもそういった可能性があるとしたらどういった方法があるのか少しお伺いできたらと思います。

よろしくお願いします。

○**河原** 最初のほうは、何だろう、スポーツの……。

○**アンドウ** スポーツに全然関心がなかったり、全然かかわりがない人たちに対して、もしもスポーツで社会貢献していこうとなったときに、どうやってそこまで波及させていくのか。そこに対して、そもそも可能性はあるのかといったことをお伺いしたいと思います。

○**河原** 特に極端な例が、海外でということにどうしてもなるんですけれども、まずスポーツにかかわっている人で、スポーツにその場で直接かかわっていない人って周辺にもいっぱいいますよね。何が言いたいかというと、何かイベントがありますといったときに、その大会に直接かかわっている人もいれば、もっと何かこう、Tシャツをつくりますといったときに、スポーツに全然関心ないんだけどTシャツをすごくいいデザインでつくる人とか。

これ、実は日本の例で札幌であったんですけど、Sport for Tomorrowの話をしていて、じゃあ、どうやって広めるか。高校生で芸術をやっている子たちは、あんまりスポーツは関係ない。じゃあSport for Tomorrow、アンチ・ドーピングという世界があるんですけど、ドーピングはよくないねという。あれをどうやって広めようかという話になって、いろんなアイデアが出てきて、トイレトペーパーにアンチ・ドーピングはよくないっていうようなデザインを入れようとか。自分が得意なものをどうやってスポーツに巻き込むかという視点で見ると、結



構ヒントってあるのかなと思います。

だからスポーツの定義って、それでまた戻っちゃうんですけど、結構、曖昧、あやふやなところがあるじゃないですか。遊びでもいいわけですし、身体活動だとか、もっと言うと身体活動が伴わなくても、そういうところでもかかわっている人が実はいっぱいいたりする。

さっき言っていた、議論になっているように、環境を整備するところで実はすごく、ひょっとしたらナイター照明をつけるのが俺は得意だとか、それで子供たちの笑顔が——というような形で、やっぱり、する人、見る人、支える人とか、どういような人たちがこの世界をつくり上げているのかなというのを考えるという点。

それから、これは前のディスカッションでもあったんですけど、多分スポーツをやっている人、得意な人ってスポーツがすごくいいなって何となく思うんですけど、それをきちんと伝えられる言葉を持っているかがすごく大切で、じゃあ野球のすばらしさって何とか、卓球って何とか。

例えば、この間、卓球の人たちと話していたんですけども、卓球ほどあんなに健常者と身体に障害者がある人とが一緒になって同じ土俵でやれるスポーツって、垣根がないスポーツってないんですよとか。石川佳純ちゃんも、全然ラケットを持ったことがない子も、なんか一緒にできるスポーツって卓球が一番なんですよとかいうと、ああ、そうか、なんて僕も思って聞いていました。

そういうふうに、みなさんも多分スポーツが好きなのだと思うんですが、そういう方がそうじゃない人に語れる言葉、わかりやすくできること、これに答えはないのでやっぱり考えていくしかないのです。僕も今もずっと考えています。あまり答えになっていないんですが。

○アンドウ ありがとうございます。

○司会 時間の関係もありますので、最後のご質問を受けつけたいと思います。ぜひ私にという方がいれば挙手をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○ヤマキ きょうは貴重なお話をありがとうございました。法学部政治学科3年のヤマキと申します。

河原さんに質問させていただきたいのですが、最後に見せていただいたネパールの盲学校と普通学校の交流の例について、「相手側のニーズを踏まえ、実施する側が目的・対象を明確にすることが大切」と書いてあったんですが、それはどのように設定したのか。ネパールの例で、相手側のニーズというのがどこにあって、実施する側の目的と対象というのがどこにあったのかを聞きたいです。よろしくお願いします。

○河原 視聴覚、盲学校の件でいいですよ。

○ヤマキ はい。

○河原 あれ、インドネシアです。

○ヤマキ すみません。

○河原 ああ、いいです。あれ、実はトライアルでやったんです。もっと前に一度、日本でも実はトライアルで同じようなことをやったんですね。そもそも障害者の子たちと健常者の子たちがお互いに理解するツールとして何かできないかとか。まあ、そのあたりに何かがあるなどというのはちょっとこちら側でも思っていて、それを仕掛けました。これがやっぱり、やって手応えがありました。あれがよい企画なのは多分間違いないですね。ただ、あれを続けられるかとか、そこに実は課題があって、日本の中でもこういう企画ってむしろ今までどこもなかったのもっともっとやってほしいと実は言われているんですけども、そればかりやるのもちょっと我々の仕事でもないので、本当はどこかに引き取ってやってもらいたいのです。

あれはもう本当に、実は仮説というか、トライアルなんです。ただ明らかに、障害者の子たちは健常者の子たちと触れ合う機会、知る機会が少ない。健常者の子たちって、逆にああいう機会がないと本当に、障害者の子たちにちょっと違う見方をどうしても持ってしまうというのはありますよね。何かちょっと上から、かわいそうだなとか。本当はそうじゃないというのが、多分、理想で。

そういうふうには、スポーツを通じると何かできるんじゃないかという、そういう目的で仮説を立てて実施したというところです。

○ヤマキ ありがとうございます。

○司会 時間も差し迫ってまいりましたので……。

きょうはお二人の先生方からいろいろなお話で、今こんな形でスポーツ界が動いているというのを伺いました。Jリーグというプラットフォーム、もしくはJSC、日本政府という立場で動いているところという、その最新の情報を皆様とご共有していただいたんですが、僕なりにきょうのこの講演会は、多分、キーワードが二つぐらいあるのかなと感じました。

一つは、「自分たちの押しつけにならないか」ということです。久保田先生のお話にも出てきましたし、あと、これは河原先生が常日頃、多分、直面してご自身で問い続けておられることだと思いますけれども、「売名行為にすりかわらないか？」ということですよ。

ご存じの方も多いかと思いますが、きょうのタイトルにありますように、「スポーツで挑む社会貢献」といいますと、昨今、ものすごくいろんな団体、アクターが出てきております。スポーツを通じていろいろやろうと。それ自身、全然、理念的には、もしくはその人が持っている発意の段階は非常に善意によるきっかけが多いかと思うんですが、その先に何かあるかという

と、実は自分たちの組織の公益性を拡大したいとか、自分たちがやっている行為の正当性を確保したいとかいうのも見てとれなくもない状況があると思うのです。

僕自身、きょうは顔が真っ赤に日焼けしているのですが、その理由は土日、長野県に行って一日中、外にいたからです。長野県の、あるジュニアスポーツ大会で、東日本で被災した子供たちを招いて、東京都内、長野県内、もしくは岩手県、宮城県、福島県のチームを招いて小学生のサッカー大会をやるということで行ってきました。そこでは被災地以外のチームの子供たちは、リストバンドを買われるんです。多分、原価は数十円でしょうね。それが1,000円で販売され、そのバンドの収益金が、被災地から招待される子供たちのチームの遠征費というか交通費に充当されるわけです。

その大会は、とあるNGO、NPOが数年前に始めたことなんです。どんな状況かなということで、この間の土日をかけてフィールドワークしてきたんですけど、代表の方も、ものすごく熱意と善意に燃えていて素敵な方というのは多分間違いないんですが、試合会場の閉会式で、「さあ皆さん、手をつないで空を見上げましょう。こういうふうにサッカーができるのはやっぱり幸せなんですよ、みんなが絆を持って、それに感謝しよう」なんて言っているとき、僕は“うわ、何だこれは”みたいな妙な感覚を覚えてしまいました。

多分、間違っていないかもしれないんですけど、僕はなんか、いささかうさん臭さを感じたんです。僕はね、皆さんがどう感じるかはわかりませんが、そこに地元のメディアがガーンと寄ってきて子供たちの写真を撮りに来て、いろいろな広報活動も同時に展開する。「はい、笑って、笑って。交流しているような感じで皆さんポーズして！」なんて、宣伝用の写真もいっぱい撮っているわけですね。“ああ、やっぱりそういうことかな”なんて思いつつ、これはまだ僕は調査を始めたばかりなので結論を見出せていないんですが、こういう団体がこれからいっぱい出てくるんだろうな、東京2020年に向けて——言ってみれば、近年の新しいスポーツ界の現象です。まさにこのタイトリングのとおりなんです、その先には、もちろん理念と善意に燃える個人的な、もしくは組織的な理念があるのだけど、その過程には何かまた別のものが透かし見えてくるなというのを感じてしまいました。

きょうお二方をお呼びしたのは、そういった活動を最前線でされていながら、先の長野の事例と異なるエピソードがあります。先ほどご紹介がありました久保田先生の事例で言いますと、貧困家庭の児童が、要するに塾にも通えない、経済的余裕がない。そういうことに対してNPO法人の育て上げネット（ですか）と連携して、Jリーグのプラットホームを使って行政と連携して活動を展開していく。すごいなって、率直に感じましたけど、それってその先に何があるのかなというのを、その話を聞いたときに思ったんですね。ところが、実は活動を進めていく

と、その試合会場に行く交通費もないような子どもたちがいるというようなことが判明してきたと。久保田さん曰く、そこまで思いが至らなかった。そのことを反省されて、やるならそこまでケアしなきゃいけないと痛感するようになったということです。

さらに、僕がFC東京さんの取り組みがすごいなと思ったのは、実はそういう試合観戦に実際に来ていただいて、通常によくあるパターンは、一定の、まあ言ってみれば特別席を提供するような設定にします。普通に売買すれば一般的な値段よりはかなり高価な席にそういった子たちを集めて、「はい、いい席どうぞ」なんていうことをされると思うんですが、久保田さんはそれをされなかった。久保田さん、その理由はどんなものだったのでしょうか？

○久保田 僕は、まあ、やっぱり継続したかったというところですね。継続したかったことの一つは、初めてだったので、まあ一番安い席でやってもらう中で、そうすると何の問題が出るのかなとか、ああ、これならできるのかな、でもやってみたらこういう問題が出るのかなと。問題が出るならまた次に変えなくちゃいけないしということをしかりと把握したかったからという部分ですね。

あとは多分、今後も一人で、もし何か将来的にふらっと来てもらうにしても、多分、そういう体験を持ってということになってくるんだろうからというあたりでしたかね。

○司会 以上のような理由で、Jリーグ村井チェアマンも当日お越しいただいたんですが、「チェアマン登場、そしてご臨席」なんていう形態ではなく、お忍びのような形で当日観戦に来られ、そのFC東京さんの取り組みをご視察されたということなんですが、その話を久保田さんから僕はお伺いしたときに、そういう継続性、要するにサステナビリティですね。そんなことを、やっぱり善意に基づいたといっても考える必要——善意に基づくからこそ、それを継続するために、「スポーツで挑む社会貢献」という分野においてはとりわけ重要なんじゃないかと。単発でやっても、それは自己満足で終わる危険性もかなり高い。そのようなことを少し皆様と共有したかったという思いもあります。

まさにその日本におけるサステナビリティとか、スポーツと開発の本当のフロントランナー、先ほどご紹介がありました社会開発コンサルタントの河原さんご自身は、この職に就くまでにフィリピンのコミュニティ開発の仕事に従事されていました。要するに、武装勢力に対してどういうふうな支援のあり方が必要なのか。そんな地域において単発的な援助をしたところで何の効果もない。どうやったら継続的なコミュニティ開発ができるんだろうかというのを、まさに身の危険を感じながら数年にわたってそんなプロジェクトに従事されてきた。そんな方がSport for Tomorrowのディレクターにご就任されたというような事情は、僕はそれを聞いたとき、ものすごくうれしかったんです。よくぞ、そうした人材を日本スポーツ界は見つけてく

ださったなど。

何かそういう方々が、まあ、トレンドではあるんですが、トレンドの本当に最先端を行っているような人たちは、自問自答しながら苦悶しつつ、理念とは違う裏側で起きていることを見つめつつ、苦しんで苦悶して、だけど少しずつ進んでいるような状況。そんなことが、きょうのお二人のプレゼンテーションの中から、少しでも会場の皆さんに伝われば、この講演会が開催された意義があるかと思います。

最後になりますが、久保田さん、河原さん、きょうのご感想を含めてお言葉をいただければと思います。

それでは、久保田さんからお願いします。

○久保田 きょうはありがとうございました。

僕もこの機会をいただいて、結構いろいろ振り返るよい機会になりましたし、いただいた質問なんかもうまく答えられなかった自分を反省しつつ、逆にさっき言ってくれた場所の問題など、やっぱりもう少し違うことを考えなければいけないなとか思いました。さっきの河原さんへの質問の秋田の件とかも、でもあれは途中で僕も触れたように、やっぱり芸術とか、ああいうものだからこそその違いを見つけてないし。

でも、質問とかを聞きながら、ひょっとするとスポーツはあまり関係なくて、ちょっとずれちゃいますけれども究極的には、やっぱり住んでいる人だったり、みんなが幸せになればということだから、まあ、無理してスポーツ、スポーツじゃなくてもいいのかなと。ちょっと変な言い方ですけど、そんなことも思いました。

一応、感想とお礼です。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

では、河原先生、お願いします。

○河原 どうもありがとうございました。

先ほどの続きになってしまいますが、皆さんにお伝えしたいのは、スポーツもいいんですけどもスポーツ以外のことも広く見てもらえると、むしろまたそれでスポーツのよさがわかるかなと思いますので、いろいろなことにチャレンジしてみてください。

もしあれば、まだここにいるので、あと何かあったら連絡くださって結構ですので。久保田さんは忙しいけれども、私は多分、時間がありますから大丈夫です。

繰り返しですが、本日はありがとうございました。

○司会 それでは、お二人に盛大な拍手を。きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

○司会 それでは、ただいまをもちまして、2016年度中央大学保健体育研究所の公開講演会を終了させていただきます。

ご臨席いただきまして、本当にありがとうございました。

— 了 —

演者プロフィール：

久保田 淳 氏

筑波大学体育専門学群を卒業し、都市銀行に勤務。その後退行して筑波大学院に入学、体育研究科を修了。2001年よりFC東京（東京フットボールクラブ株式会社）のフロントスタッフとして、地域活動やサッカースクール事業の推進を担当。社会の課題にスポーツのチカラ（価値）をもって向き合っている。2017年4月より東京経済大学非常勤講師も務めている。

河原 工 氏

長年にわたりJICA やアジア開発銀行のコンサルタントとして、開発途上国に対する国際協力プロジェクトに従事する。

専門分野は、コミュニティー開発、平和構築、組織・ガバナンス強化であるが、チームリーダーとして現地でのプロジェクト運営や交渉・調整業務も行う。2014年9月より、スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム事務局ディレクターとして、SFTの運営を取りまとめている。